まえがき

このブックガイドはおじさん 2 人が編者をつとめている。そのうち 1 人（ちょっとおじさんの方）は東南アジアの政治の研究をしている。彼が大学生だった 1990 年代の後半あたり，東南アジア政治に関する教科書は『東南アジア政治学』（成文堂 1999）くらいだった。他の分野でも，東南アジアに限定した教科書のようなものはわずかだった。ということはつまり，東南アジアを題材とする授業もまだ少なかったということである。

それから 20 年超。隔世の感がある。東南アジアと銘打った大学生向けの教科書が増え，東南アジアを含むアジア全般に関するものも合わせれば，Amazon で検索すると 10 冊くらいは見つかる。その中身は，各国別のものもあれば，テーマごとに東南アジア諸国を横断して比較したもの，地域全体の国際関係や自然環境を検討したものもある。実に多様である。こうして教科書が増えた理由が，東南アジアを冠する授業が各地の大学で増えているからだとすれば，東南アジア研究が大学教育の中で定着してきた結果であろう。なかなかうれしい。

教室での授業だけでなく，大学などの海外研修で東南アジアの国々に学生たちが滞在する機会も増えている。編者のもう 1 人（もっとおじさんの方）は，アジアやアフリカの地域研究を専攻する 5 年一貫制の大学院の教員なのだが，最近の入学試験の面接では，タイ，フィリピン，ミャンマー，マレーシアなどでの研修や留学経験が志望動機になっている日本人受験生が目に付く。東南アジアで育ち，現地語がペラペラの学生もいる。東南アジアの国々に滞在して，異なる社会を体験している日本人学生が増えていることは，私たち東南アジア研究者にとっては喜ぶべきことだ。

そこで，教科書で一通り学んだり，現地を経験したりして，もっと深く東南アジアのことを知りたいと思った学生さんに向けて作ったのが，この

ブックガイドである。初歩的な知識や体験からもう一つジャンプして，学問として東南アジアを学ぶための小さな跳躍台のようなものである。

各解題が対象とするのは，東南アジア研究では古典になっている本の中でも，日本語で書かれたものと，日本語訳があるものである。最新の研究成果ではないが，長い年月の風雪に耐え，現代になっても読む価値を認められている古典的な仕事である。のちの研究によって乗り越えられたものもあるが，研究史の中で知っていなければならない本ばかりで，読んで損をする作品は一つもない。

で，とりあえずの 15 冊。自然，歴史，政治，社会，経済といった視点から東南アジアをみられるように，各分野の古典を選んだ。すべての分野に精通することは無理だとしても，一通り知っておくと自分の専門とする分野の見方が変わるような本ばかりである。東南アジアで調査をしたり，東南アジアの事例を扱って論文を書こうとしている人にも役立つリストになっている。つまみ食いでも，全部食いでも，好きなようにこのガイドを利用してほしい。

実は，東南アジア研究の古典的な仕事の多くは英語で書かれていて，最近では，現地語の研究も目に見えて増えている。どちらも，ほとんど翻訳されていない。決して日本語の研究水準が低いというわけではないけれども，日本語で書かれているものや，日本語訳ばかりでは限界がある。それが実に残念。今後，第 2 弾，第 3 弾とシリーズが続けば，そうした本も紹介できるかもしれない。

最後にお礼を。まず，スポンサーに。このブックガイドは京都大学・東南アジア地域研究研究所の所長裁量経費の支援を受けて作成された。ご支援に感謝いたします。次に，執筆者の皆さんに。ご多忙にもかかわらず，快く執筆を承諾してくださった。心より御礼申し上げます。あと，協力者の皆さんに。このブックガイドは，京都大学アジア・アフリカ地域研究研

究科の読書会「東南アジア研究の古典を読む」と連動して作成された。受講生の皆さんの報告や討論は，本書をまとめるにあたって大変有益だった。そして最後は，プロジェクト・マネージャーに。弊所編集室の設楽成実さんが本書の企画から完成までさまざまなかたちで管理してくださった。ずぼらで大雑把なおじさん編者には絶対にできない丁寧な仕事ぶりに感服です。テリマカシ，バニャック（本当にありがとう）！！

編者

※本書内表記についての補足
　翻訳によって著者名の表記が異なる等の場合（ギアツとギアーツ，ウィニッチャクンとウィニッチャクーン等）は，あえて統一していない。